

詩篇 70 篇

指揮者のために。ダビデによる。記念のために

- 1 **神**よ。私を救い出してください。主よ。急いで私を助けてください。
- 2 私のいのちを求める者どもが、恥を見、はずかしめを受けますように。
- 私のわざわいを喜ぶ者どもが退き卑しめられますように。
- 3 「あはは」とあざ笑う者どもが、おのれの恥のためにうしろに退きますように。
- 4 あなたを慕い求める人がみな、あなたにあつて楽しみ、喜びますように。
- あなたの救いを愛する人たちが、「**神**をあがめよう」と、いつも言いますように。
- 5 私は、悩む者、貧しい者です。**神**よ。私のところに急いでください。
- あなたは私の助け、私を**救う方**。**主**よ。遅れないでください。

詩篇 40 篇 13～17 節

- 13 **【主】**よ。どうかみこころによって私を救い出してください。**【主】**よ。急いで、私を助けてください。
- 14 私のいのちを求め、**滅ぼそうとする者どもが**、**みな**恥を見、はずかしめを受けますように。
- 私のわざわいを喜ぶ者どもが退き、卑しめられますように。
- 15 **私**を「あはは」とあざ笑う者どもが、おのれの恥のために、色を失いますように。
- 16 あなたを慕い求める人がみな、あなたにあつて楽しみ、喜びますように。
- あなたの救いを愛する人たちが、「**【主】**をあがめよう」と、いつも言いますように。
- 17 私は悩む者、貧しい者です。**主**よ。私を顧みてください。
- あなたは私の助け、私を**助け出す方**。**わが神**よ。遅れないでください。

①用語の省略

今日学ぶ詩篇70篇の内容は、詩篇40:13-17とほぼ同じです。内容的には、何らかの迫害を受けていた詩人が速やかな助けを神に祈り求めています。ただ、70:1, 2は40:13, 14よりも短くなっているところから（「みこころによって」「滅ぼそうとする者ども」「みな」の省略）、より切迫した思いが読者に伝わるものとなっています。

②69篇、71篇との関連

69篇を振り返ってみますと、29節に「しかし私は悩み、痛んでいます」という表現が出てきました。ここと70:5「私は、悩む者、貧しい者です」の関連性から、69篇と70篇は並べられていると思われます。また、続く71篇とも多くの関連が見られます。

70 篇

1 節、5 節 —————

2 節 —————

4 節 —————

71 篇

12 節

13 節、24 節

6 節、8 節、14-16節、24節

③40篇と70篇の用語の違い

40篇で「主」（「ヤハウエ」または「アドナイ」）となっていたところが、70篇では「神」（エローヒーム）に変更されています。意図は分かりませんが、いずれも置き換え可能の言葉であることが分かるでしょう。

また、40:15で「色を失いますように」と言われていたところが、70:3では「うしろに退きま
すように」と変更されています（後述）。

④詩人の心

では、70篇のメッセージを読み取ってまいりましょう。この詩篇には何度も「急いで」という表現が出てきます（1節、5節）。また、その極め付けのように「遅れないでください」（5節）という言葉でもって締めくくられます。神を急かすかのように、「堪え難い状況です。もう我慢なりません。あいつをどうにかしてください」と、苦境からの解放を求めているのです。こんなお祈りをしてもよいのかと思われませんか。もはや遠慮のかけらもなく、神の介入を求めて必死に叫ぶ詩人の姿があります。

詩人の状況を読み取る努力をしてみましょう。「私のいのちを求める者ども」（2節）、「私のわざわいを喜ぶ者ども」（2節）、「『あはは』とあざ笑う者ども」（3節）という表現から、詩人が病で苦しんでいるとき、または命からがら逃げ延びているとき、その姿を笑っている者がいたということが分かってきます。ダビデがサウル王に命を狙われていたときか、息子アブシャロムの反逆により都落ちしたときか。

私たちの人生において、苦しんでいるときに「ざまあみろ」と言われるほど悔しいことはないでしょう。「あはは」と訳された言葉は原文では「הָאָהָה／ヘアーハ」ですが、敵の不幸を見て喜び、「見ろ、見ろ」と嘲笑う感嘆詞です。このデリカシーのない笑いをまともに受けた詩人の苦悩が窺われます。

40:15で「色を失いますように」（אֶשְׂמַח／ヤーショムム）と言われていたところが、70:3では「うしろに退きますように」（אֶשְׁבֹּחַ／ヤーシューブ）に変更されています。この発音の似た二つの単語には大きな意味の違いがあります。前者が「荒廃する」という意味であるのに対し、後者は「悔い改める」「向きを変える」という意味であり、詩人はただ敵が破滅することを求めているのではなく、神に対して正しい生き方をするよう求めていることが分かります。もし40篇がダビデの若い頃に書かれたものであり、70篇が晩年に書き直されたものだとすると、ダビデの信仰のあり方が非常に成熟してきていることが窺えます。

4節では詩人の視点が「あなたを慕い求める人」「あなたの救いを愛する人たち」に移されます。今までは敵ばかりが目映っていましたが、ハッと我に帰り、「いや、そうではない、私には自分を支え、祈り、信仰をもって苦難を共に乗り越えてくれる仲間がいるのではないか」という詩人の煌めきが目に浮かびます。一つの旧約聖書の記事を取り上げてみましょう。かつて、アラムの大軍がイスラエルの町を包囲したとき、預言者の輩^{ともがら}は絶望の声を挙げました。

神の人の召使いが、朝早く起きて、外に出ると、なんと、馬と戦車の軍隊がその町を包囲していた。若い者がエリシャに、「ああ、ご主人さま。どうしたらよいのでしょうか」と言った。すると彼は、「恐れるな。私たちとともにいる者は、彼らとともにいる者よりも多いのだから」と言った。そして、エリシャは祈って【主】に願った。「どうぞ、彼の目を開いて、見えるようにしてください。」【主】がその若い者の目を開かれたので、彼が見ると、なんと、火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちていた。(Ⅱ列王6:15-17)

人の霊の目が開かれるとき、現実が目に見えて変わっていなかったとしても、神の絶対的な守りを見出すことができます。それまで怒り、焦り、嘆き、叫んでいた心が、静まり、堂々とし、神が必ず良きに導いてくださるという確信に満ち溢れます。信仰者にはこのような体験をすることができるのです。

「私は、悩む者、貧しい者です」(5節)と告白するところに、自分の弱さを認める詩人の実直な姿があります。神に対するそのような姿勢は、まさしく御心に適っているでしょう。

「あなたは私の助け、私を救う方」(5節)。短い信仰告白ながら、神がどういうお方であるかをしかと見つめた詩人の眼差しが感じられます。

「急いでください」「遅れないでください」。私たちもこのような神の心を動かす祈りをささげていきたいと思います。神は必ず私たちの霊の目を開いてくださいます。